

開催の建議に反映している。つまり本書で指摘されている「海外発展主義」の展開と同時期に、こうした主張がなされていたのである。

しかし本書は未踏の領域に足を踏み入れ、それを体系化しようとする意欲作で

■ 書 評 ■

須田康之 [著]

『グリム童話〈受容〉の社会学——翻訳者の意識と読者の読み——』

あり、今後の教育諸領域の研究全般に大きく資する意味においてその評価が下がるものではない。今後の展開を期待したいものである。

◆A 5 判 362頁 本体8,500円
玉川大学出版部 2003年2月刊

神戸大学 山内 乾史

書物には、著者の人柄が否応なく滲み出るものである。本書は、須田氏が地道に堅実に積み重ねてこられた「グリム童話」研究の集成である。旺盛な文献収集欲、緻密な理論的検討、着実な歴史的検討、明快な実証研究を順を追って進めていく手堅さは、近年よくある底の浅い「ガクモン」ものに食傷気味の評者には新鮮に映った。

まず、本書の内容を紹介しよう。

第Ⅰ部は「本研究の理論的検討」と題して、精力的な先行研究収集の成果と緻密な理論的検討が行われている。当然のことながらその収集の対象はドイツ語文献にまでおよび、日本人の立場から何が問題なのかを明確にしている。

ただ、些か、手の内の見せすぎという感じがしないでもない。須田氏が、自分の研究の成果をすべて盛り込むという意気込みで臨まれたのか、あるいは緻密な理論考証に不可欠と考えられたのかは分からぬが、ごたごたといろいろな先行研究が盛り込まれすぎて、肝心の論点をぼか

している恨みがある。

第Ⅱ部は「翻訳者の意識——社会的レベルでの受容——」と題する。翻訳者を通すことによって日本ではグリム童話が選択的に受容されてきたわけであるが、何が選ばれたのか、それはなぜかという問題が追求される。中には原文・挿絵を日本風に改変したものもある。その背景を明らかにしようというのが著者の狙いである。

ただ、第Ⅲ部でもそうであるが、「残酷なもの」が除外されソフィスティケートされたという論述が何カ所にもわたって諄く繰り返されるのは、本書がごく常識的なことを確認したに過ぎないのではないかとの誤解を招く危険性がある。実はそうではないことは、本書をきっちり読む人間には十分に理解できるのだが、本書の意義を理解する評者としてはもう少し論述の仕方において工夫の余地はなかったか、もっと本書の独自性をアピールする方法はなかったかと惜しまれる。

第Ⅲ部は「読者の読み——読者レベル

での受容——」と題して、翻訳者によって選択的に受容されたジャパニーズ・ヴァージョンのグリム童話が読者である子ども、保護者にどう伝わったのかが、著者の実地調査をもとに分析される。子どもと成人の比較や男児と女児の比較が盛り込まれ、非常に興味深い。そして本書が扱う問題が、文芸社会学の一領域に発生する小さい問題ではなく、多くの他の分野にも共通するきわめてベーシックで普遍的な問題であることが認識されるであろう。その意味で本書の意義は表題から受ける印象以上に大きいのである。

ただ、奇異な感じを受けるのは、冒頭部分でグリム童話の成立した時期と市民階級の台頭期との関連性を強調しているにもかかわらず、須田氏の実証部分では社会階層や社会階級あるいはそれに類する概念が全く捨象されている点である。何でもかんでも社会階層や社会階級と結びつけて解釈しようとするのは、凡々たる社会科学者の悪い癖かもしれない。しかし、『〈受容〉の心理学』ではなくて『〈受容〉の社会学』という表題を掲げる本書がそういったことを捨象してしまうのは、いかがなものかと思われる。また調査の対象となった保護者や児童の属性についてもその社会的属性についての情報に乏しいのが気になる。心理学的なアプローチであれば、社会的属性による差違を問う必要はなく、心理的同一性を前提に議論を進めればよいのであろうが、

『社会学』であるならばもう一步踏み込んだ分析が必要ではないだろうか。

最後に、終章では以上の研究成果をまとめ、その意義を明らかにすると同時に、今後の課題を明示している。

以上、本書の価値と意義を十二分に認めた上での妄言と、ご寛恕いただきたい。間違いなく、本書は「翻訳の社会学」の領域の最重要文献となるであろうし、このような国内先行研究の手薄な領域に踏み込まれた労を多としたい。須田氏の誠実な分析をきっかけにして文芸の教育社会学的な研究に関心を持つ人が増えれば評者にとっても喜ばしいことこの上ない。須田氏も指摘するとおり、文芸は教育社会学的な側面からみても大変豊饒な題材を含んでいる「宝の山」である。その切込隊長役を須田氏は務められたわけである。したがって些か方法論的に熟さないものがあつたとしても、それは必ずしも須田氏の責ではなく、パイオニア役を務める研究に必ずつきまとう問題なのである。むしろこれは評者を含む後進の課題なのであろう。浅薄な「ガクモン」ものばかりを執筆して、これも研究なりと澄まし返っている輩が、パイオニアの労苦を十分に理解することなく本書を批判する時には、須田氏を徹底して弁護するつもりである。

◆A 5判 224頁 本体4,500円
東洋館出版社 2003年2月刊